新刊紹介

メタデータ	言語: Japanese 出版者: 公開日: 2019-11-08 キーワード (Ja): キーワード (En): 作成者: 清水, 建美, 里見, 信生, Shimizu, Tatemi, Satomi, Nobuo メールアドレス: 所属:
URL	http://hdl.handle.net/2297/00055995

This work is licensed under a Creative Commons Attribution-NonCommercial-ShareAlike 3.0 International License.

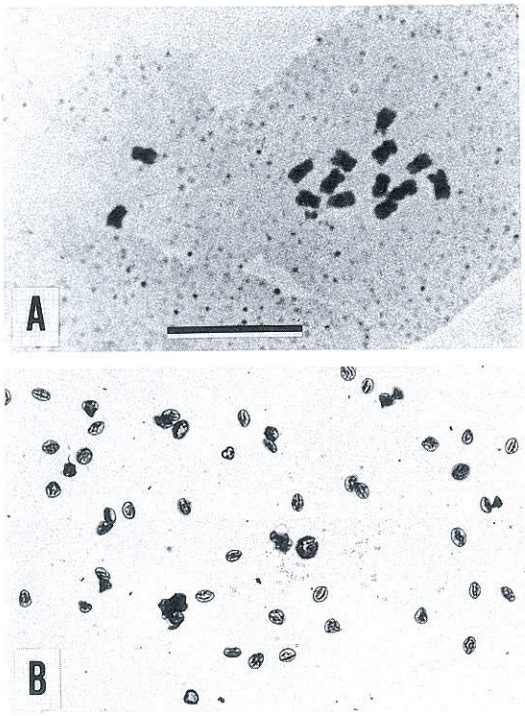

Fig. 3. Chromosome (2n=14) of *R.*×*masakii*, bar indicates 10 μm (A); no good stainable pollen grains of *R.*×*masakii* (B).

coverer.

摘　要

この新雑種は真崎博氏によって1983年6月12日に山口県下松市茶臼山で発見され，その年より富山大学で栽培されてきた。

この植物はクサイチゴとクマイチゴのそれぞれの形質を合わせ持っていると思われ，その形態的特徴，特に茎の高さや太さ，葉柄の長さや葉頂の角度が中間的であり，また，秋から冬期の葉の状態もその推定両親の中間の性質を示した。花では，花の大きさ，雄しべや雌しべの数は中間的であるが，花弁の形はややクサイチゴ的で，花弁の反転の様子はクマイチゴに似ている。

栽培すると，約半数の花は不稔であるが，半数近くは1花当たり数個から60個ぐらいの小果実をつける。種子の大きさはクマイチゴに似ている。これら3分類群の生育環境は類似し，花期はほとんど同じで，すべて虫媒花で，また，これらの植物はすべて2倍体2n=14であることから，容易に雑種を作るものと思われる。

筆者は真崎久氏の案内で1986年4月28日に原産地の茶臼山でこの植物を観察することができた。現地では，クマイチゴ，クサイチゴ，モミジイチゴ，ビロードイチゴ，ビロードクサイチゴが生育しているが，当雑種は2，3株のみ見られただけであった。栽培すると盛んに地下茎で繁殖するが，他のキイチゴ属の雑種に比べると，どちらかというと繁殖力は弱いかもしれない。

最後に，本雑種を発見され，現地をご案内下さった，真崎博氏，久氏の父子に，厚く感謝の意を表します。染色体の観察でお世話になった岩坪美兼氏に対し，また，ラテン文の校閲をしていただいた豊国秀夫先生に対し，お礼申し上げます。

(Received Nov. 19,1988)

○　**金沢大学理学部附属植物園年報　第12号**　同植物園，1989年3月30日発行。B5判37頁。非売品。

金沢大学は，金沢城本丸跡に理学部附属の施設として学内措置によって植物園を設けている。面積は約5haで大へん小さな植物園であるが，中には樹令400年といわれるスダジイの大木をはじめモミやウラジロガシの大木があり，小立野段丘の最北端を占める金沢市街地中央部の緑地として，大学はもとより市民や観光客に親しまれている。ところで，本植物園年報は1968年創刊，第6巻までは年刊，その後7，8巻合併号（1975）および9，10巻合併号（1977）は隔年刊となり，1978年以降は1987年刊の第11巻の発行まで10年間は休刊となった。1987年12月に第11巻をもって再刊となったが，このほど続いて第12号（呼称変更）を発行することができた。内容は，当植物園内での仕事のみならず，広く自然史関係の報文を収録することとし，かつ，国際的な評価も得られるように本号から英文アブストラクトおよびキー・ワードを入れることにした。本号には，以下の5篇の報文が収録されている。

清水建美：日本産草本植物の地下器官の形態　(1)根茎の類型

加藤恵一・清水建美：日本産ネコノメソウ属植物の種子表面の微細構造と分類

綿野泰行：フユノハナワラビの交配様式と集団の遺伝的構造の予備的解析

池田善英：白山山系におけるヘビ類の周年活動――イヌワシの餌としての個体数の季節変化

池田善英・井上文子：白山山系のブナ林における林床相対照度と落葉量の季節変化

入手御希望の研究機関，団体には交換によって広く頒布し，当植物園の充実に資したいと考えているので，関心をお持ちの方は御一報下されば幸である。

（清水建美）

1,300～2,600 m の岩石地の *A. sinica* は，ほとんどトダイハハコで，兎岳の岩場などにもかなり見られることを報告した。この山地の北部では，戸台川と山をへだてた釜無川ぞいの山梨県側にも知られている（植松，1981)。

長野県では，戸台から北沢峠への途中のほかに，大鹿村の豊口山と上村の尾高山中腹（しらびそ峠の東)の石灰岩壁には，やはりトダイハハコがあるが，ヤハズハハコは見なかった。また，山崎（1965）も生育地は石灰岩とはかぎらないと述べているが，静岡県側で聖沢から聖平への登りで出合ったところも，石灰岩ではなかった。ただ，岩上でクサボタン，ホタルサイコなどと混生している状況は，石灰岩地とよく似ている。

杉本（1984）は，ヤハズハハコは静岡県では南アルプス全域に多いとして，トダイハハコには言及していないが，ここでのヤハズハハコにはトダイハハコが含まれている可能性が大きい。なお，ヤハズハハコは，関東・中部地方では多くの生育地が知られ，たとえば丹沢山地のように石灰岩地以外にも普通に見られるところがあるが，中国・四国地方には少なく，分布はほとんど石灰岩地かその周辺にかぎられている。

トダイハハコは，秩父山地にも分布している。山崎（1985）は，十文字峠での写真を出しているが，もっと東の三峰山地では，私の見たものはヤハズハハコであった。ヤハズハハコは変異が多く，トダイハハコは全体に白毛が密生するが，両者の区別の難しい個体もあるという(山崎，1965)。しかし，赤石山脈で見るかぎり，トダイハハコの特徴はかなりはっきりしていて，やはりヤハズハハコの変種としておくのがよいと思う。

トダイハハコは，大井（1975，1983）の日本植物誌にも *A. sinica* var. *pernivea* で出ているが，*A. todaiensis* はその異名にはなっていないので，この機会に学名と文献の整理をしておく。

Anaphalis sinica HANCE var. *pernivea* T. SHIMIZU in J. Fac. Textile Sci. & Technol. Shinshu Univ. 36 (A), **12**: 66 (1963); in Act. Phytotax. Geobot. **21**: 28 (1964)—YAMAZAKI in Journ. Jap. Bot. **40**: 342 (1965); Alp. Fl. Jap. 83 (1985)— Ohwi, Fl. Jap. new ed. 1297 (1975) —UEMATSU, Fl. Yamanashi 275 (1981) —KITAGAWA, OHWI's Fl. Jap. 1443 (1983).

A. todaiensis HONDA in Bot. Mag. Tokyo **46**: 373 (1932)

引用文献

KITAMURA, S. 1937. Compositae Japonicae. Mem. Coll. Sci. Kyoto Univ. ser. B, **13**: 1-421.

北村四郎，1961. 日本菊科植物補遺訂正 II. 植物分類，地理 **19**: 12-17.

——. 1981. キク科，「日本の野生植物 III」(佐竹義輔ほか編)，156-235. 平凡社.

大田 弘・小路登一・長井真隆. 1983. 富山県植物誌. 430pp. 廣文堂，富山.

里見信生監修・石川植物の会編集. 1983. 石川県植物誌. 227pp. 石川県.

SHIMIZU, T. 1963. Studies on the limestone flora of Japan and Taiwan, Part II. J. Fac. Textile Sci. & Technol. Shinshu Univ. No. 36, Ser. A. No. 12: 1-88.

清水建美. 1982. 原色日本高山植物図鑑(I). 72pl. 331pp. 保育社.

杉本順一. 1984. 静岡県植物誌. 814pp. 第一法規.

植松春雄. 1981. 山梨の植物誌. 595pp. 井上書店.

山崎 敬. 1965. トダイハハコについて. 植物研究雑誌 **40**: 342.

——編. 1985. 日本の高山植物. 165pl. 139pp. 平凡社.

(Received Oct. 8, 1988)

○ 内藤登喜夫 **ゆきわりそう** 淡交社，平成元年1月13日発行。13×22.5 cm, 92頁(内64頁カラー図版)，2,000円。

ユキワリソウは，その名を聞くだけでも、春の訪づれを知らせる可憐な草である。しかし，2つの植物に，同一名があるので，混乱をさけるために，和名の点で問題がある。本書であつかった，キンポウゲ科のユキワリソウは，徳川時代に，栽培が流行し，天保12年，桜溪主人著"長楽花譜"は，特に有名である。本書は，"昭和長楽花譜"と称すべきもので，多弁花系・奇花系・乙女咲系・日輪咲系・丁字咲系・二段咲系・三段咲系・千重咲系という区別で，それぞれに属する品種を，カラー写真でしめているので，見ていると実に楽しい。しかし，反面、近年、原生地が無残にも荒らされている情況には，腹立たしい。又，悲しくなる。（里見信生）

○ **植物おぼえがき**（山中二男）Tsugiwo YAMANAKA: Miscellaneous Notes on Japanese Plants

日本の植物の分類，分布などで，近ごろ気付いたことのいくつかをとりあげ，話題を提供する。

1．**ミヤマイワニガナ**　1983年の南アルプス赤石岳への登りでは，長野県大鹿村を小渋川ぞいに行って，広河原で泊まった。このあたりの川岸の安定地には，オノエヤナギを主とした林があり，クサボタンも見られるが，不安定な礫地に生えているのは，おもに草本である。トダイアカバナや小渋川が type locality のアカイシコウゾリナのほか，カワラニガナ，ホソバノヤマハハコ，ホソバムカシヨモギ，ヨツバヒヨドリなどが生じ，やはり葉の狭い植物が多いことに気付いた。ヨツバヒヨドリも，幅が2.5 cmほどで，ハコネヒヨドリともいえるものになっている。

翌日からは悪天候のため，4日間停滞したが，荒川岳（前岳）からの土石流に近いすさまじい濁流は，川原の植物をこのあとどう変えるのかと考えた。あくる年，荒川岳からの下りにここを通ってみると，一目で植物が貧弱になっていることがわかった。前年あったイワウサギシダはなく，多かったトダイアカバナもほとんど見なかったが，ミヤマイワニガナが新たに生えていた。機会があれば，また訪れてみたいと思っている。

ところで，ミヤマイワナガナは，イワニガナとおなじとする見解がある。そこで調べてみると，これにはイワニガナと別の種とみなすほか，その亜種，変種または品種とするすべての名がついている珍しい例であることがわかった。古いものから順にあげておく。

Ixeris capillaris NAKAI, Rep. Veg. Kamikochi 41 (1928)

I. stolonifera A. GRAY subsp. *capillaris* (NAKAI) KITAMURA in Bot. Mag. Tokyo **49**: 287 (1935)

I. stolonifera form. *capillaris* (NAKAI) OHWI, Fl. Jap. 1246 (1953); in Bull. Nat. Sci. Mus. No. 33: 90 (1953)

I. stolonifera var. *capillaris* (NAKAI) T. SHIMIZU, New Alp. Fl. Jap. Col. **1**: 11, 311 (1982)

2．**シロバナアサマリンドウ**　四国の山地では，アサマリンドウは普通の植物で，この花は秋の山歩きを楽しませてくれるものの一つである。まれに白花も見られ，シロバナアサマリンドウの名がある。ただ，和名だけでなくまったくおなじ学名が，別べつに下記のようにつけられている。なお，このほかに赤沢時之氏は，高知女子大学紀要で，多くの新名を発表していることを付け加えておく。

Gentiana sikokiana MAXIM. form. *albiflora* AKASAWA et E. HIROSE in Bull. Kochi Wom. Univ., Nat. Sci. **25**: 5 (1977)

G. sikokiana form. *albiflora* TOYOKUNI in Journ. Jap. Bot. **58**: 315 (1983)

○ A. MIYAWAKI *et al.* (ed.) **Vegetation Ecology and Creation of New Environments**　東海大学出版会 1987　¥18,000　B 5判，473ページ

1984年8月，「植生生態学と新しい環境形成」をテーマに国際植生学会のエクスカーションが，北は秋田県から南は和歌山県まで本州を縦断して16日間にわたっておこなわれ、エクスカーション後は，東京で3日間のシンポジウムが開かれた。私も大会委員の一人として長野県縞枯山および霧ケ峰においてエクスカーションに参加し，若干の役割を果した。本書は，この折のシンポジウムに提出された論文40篇（英文27篇，独文13篇）を第一部，エクスカーションの記録を第二部として編集したもので，1988年6月に完成した（ただし，出版年は1987年となっている）。なお，第一部のはじめの部分は，沼田真大会委員長の開会のことば，常陸宮殿下のおことば，長洲神奈川県知事の論評など11篇の記事に当てられている。

この学会には、海外からはヨーロッパ13ケ国，カナダ，アメリカ合衆国、ブラジル，タイ，中国，韓国から総勢71名の参加者があり，収められた論文中30篇がこれら海外の参加者によるものとなっている。論文は，バーゼル大学の Zoller 教授による「人と自然の関係史」やローマ大学の Pignatti 教授の「地中海域における自然植生と人間との関連」をはじめ，単なる植生論を超えていずれも植生と人の関係といった視点から書かれているのが特徴である。新しい環境形成への世界中の植生学者の意気込みあふれる論文集ということができる。

第二部は，前国際植生学会長夫人 Charlotte Ellenberg 博士の手になるもので，編者の言を借りれば，エクスカーションの内容を「ドキュメンタリー科学日記風に」まとめてある。その中に，本州の内陸部の潜在自然植生はブナ群団とされているようだが，ヨーロッパアルプスと比べて考えてみると，それは疑問であるという指摘や縞枯れは風の影響だけではなく樹令そのものとの関係を考えるべきだというくだりなど，短期間の中での彼女の慧眼に感心させられる。

いま一つユニークなのは，論文ごとに著者の顔写真が掲載されていることである。現代の植生学の果たすべき役割を真剣なまなざしで著者が語りかける――そんな論文集にみごとにまとめ上げた編者の努力を多としたい。

（清水　建美）

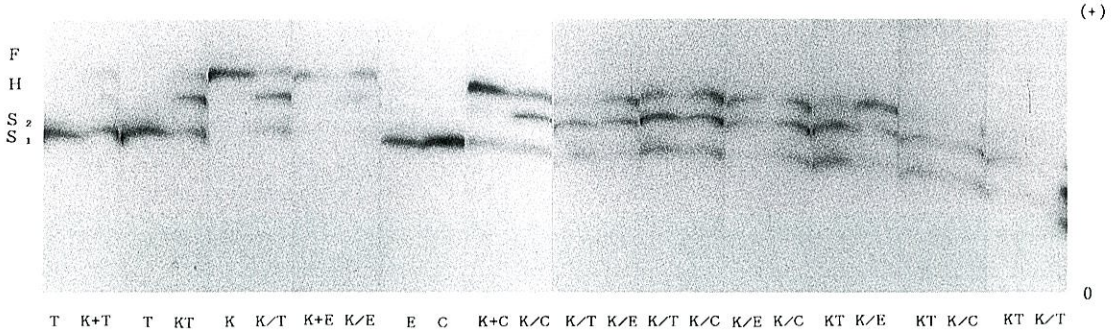

Fig. 2. Ten zymograms showing results of *in vitro* hybridization of ADH. Abbreviation: T, *T. tschonoskii*; K, *T. kamtschaticum*; E, *T. erectum*; C, *T. cernuum*; KT, *T. kamtschaticum* × *T. tschonoskii*; K/T, K/E, K/C, *in vitro* hybridization of ADHs extracted from *T. kamtschatcum* and *T. tschonoskii*, *T. kamtschaticum* and *T. erectum*, and *T. kamtschaticum* and *T. cernuum* respectively; K+E, K+C, mixture of isoenzymes extracted from *T. kamtschaticum* and *T. erectum*, and *T. kamtschaticum* and *T. cernuum*; +, anodal side; 0, original point of electrophoresis; S_1S_1, the slow migrating band; H, the hybrid band; FF, the fast migrating band. Note the hybrid band occurring at lane nos. 3, 5, 10-16, 18 and 20, but no hybrid band occurs at lane nos. 5 and 9.

of *Tillium*. Jap. Journ. Genet. **56**: 397-407.

——. and IHARA, K. 1978. A biosystematic study on the pedicellate-flowered species of the north American *Trillium* (1). Geographical distribution of major groups and their gynoecium forms. Journ. Geobot. **25**: 139-172.

——, WADA, K. and IHARA, K. 1988. Molecular evolutionary aspects of the speciation in the Japanese *Trillium*. Jap. Journ. Genet. **63**: 559.

OHNO, S. 1970. Evolution by gene duplication. Springer-Verlag, New York.

SCHWARTZ, D. and ENDO, T. 1966. Alcohol dehydrogenase polymorphisms—simple and compound loci. Genetics **53**: 709-715.

摘　要

北米産エンレイソウ属植物14 taxaについてアルコール脱水素酵素(ADH)の泳動型を10%デンプンゲル電気泳動法で調査した。日本産のエンレイソウやミヤマエンレイソウで見られるADHアイソザイムS_1S_1が北米の*Erectum*群に属するtaxaでも共通に見出された。更にオオバナノエンレイソウから抽出した酵素と*T. erectum*又は*T. cernuum*から抽出した酵素との間で試験管内分子交雑をおこない，オオバナノエンレイソウ×ミヤマエンレイソウで出来た種子から抽出した酵素と比較して，S_1S_1アイソザイムが調査したすべての種で電気泳動的に同一の酵素であることを確認した。また，*Pusillum*群と*Grandiflorum*群に属する種でADHは複合遺伝子の支配を受けていること，及び調査した無花梗群の5種全てが三重複遺伝子(tripartate gene)に支配されていることを示し，これは進化機構の重要な発見であることを指摘した。

(Received Dec. 7, 1988)

○　渡辺定路　**福井県植物誌**　自費出版。平成元年2月10日発行。　A4判，461頁＋図版58頁。　定価7,000円＋〒500円。

福井県生物目録は，昭和8年に発行されている。この書は，昭和天皇福井県御行幸に際し，天覧に供し奉り奉迎の至情を披瀝する目的で計画され，県下をあげての大事業であった。その植物之部(1〜82頁)のもとになった標本は，8万点に及び，同定には，田代善太郎氏が中心となり，京都大学在職の方々の応援により，当時，これ以上望むことのできない内容のものであった。しかし，今ではこの書も，発刊以来半世紀を経過し，見直す必要が生じていた。著者は，長年にわたり，福井県内の標本を蓄積して来られ，まことにその任を果す適任者である。今回，その努力が本書の出版として実を結んだことは，真によろこばしい。御入手御希望の方は，著者宛(振替口座金沢7-31795，加入者著者)に申し込まれるとよい。(里見信生)

○ **北陸のヒノキバヤドリギ**（里見信生）Nobuo SATOMI: *Korthalsella japonica* (THUNB.) ENGLER in Hokuriku District.

日本海側におけるヒノキバヤドリギの分布の北限を，私は，隠岐と思っていたところ，福井県敦賀市立石に産することを，渡辺定路氏に教えられた。その状況をうかがうと，それは，自生のものと判断できる。

ところが，最近，金沢市内に生育していることがわかった。その発見者である米山競一氏の御案内で，現地をたづねたが，ヒノキバヤドリギの寄生するツバキは，明らかに，造園工事の際，栽植したものであった。この工事を設計施工した金沢市花と緑の課より，請負った業者に尋ねてもらったところ，植えたツバキは，関東より購入した由で，関東の苗木業者（埼玉県の安行であろう）は，熊本・鹿児島の県境あたりで，山取りをして販売するとのことであり，つまり，今回，金沢で発見されたヒノキバヤドリギは，宿主のツバキに伴なって，九州から関東に，関東から金沢にと旅をつづけて到着した次第である。この造園地には，もともと野生のツバキが生育しているし，ヒノキバヤドリギの寄主になるヒサカキも野生しいるので，将来，ヒノキバヤドリギが，この一帯にひろがって行く可能性がある。今後のなりゆきを見てゆきたいと思っている。

○ 正宗嚴敬 **日本の自生蘭と図** 第5集 自己出版。昭和63年12月25日発行。 A 4判，74頁。10,000円。

本集では，既刊の第3集所載のキエビネ，第4集所載のエビネ・タカネ・アマミエビネ・サルメンエビネを除いたエビネ属のサクラジマエビネ・キリシマエビネ・ニオイエビネ・イシズチラン・トクノシマエビネ・ナツエビネ・オクシリエビネ・キンセイラン・マツダラン・アサヒエビネ・ツルラン・ホシツルラン・ヒロハノカラン・リュウキュウエビネ・トクサラン・タマザキエビネ・レンギョウエビネ・アリサンエビネ・ササキエビネが，既刊の各集と同様，カラー写真と線画で編集されている。御注文は正宗先生宛（〒250 小田原市入生田423，振替口座横浜1604）。

○ 池上義信（監修）・石沢 進（編集） **新潟県植物分布図集** 第9集 コーエイ印刷株式会社（〒950 新潟市弁天通1-31-30，振替口座新潟1-5599）。 昭和63年12月25日発行。A 4判，534＋図版10頁。 定価6,000円（〒別）。

第8集（本誌36巻2号に紹介）と同様，125種について水平分布図・垂直分布図ならびに引用した標本産地が記されている。第1集から本集までの登載された種の数は1,000に近づいて来たわけだが，こうなると，まさに府県単位の植物分布図集として，最高のものであり，監修・編集者の御努力には勿論のことながら，この仕事の完成に，協力されている植物同好じねんじょの会の会員の方々に，心から敬意を表する。

○ 松田義徳 **秋田県平鹿地方植物誌** 秋田植生研究会（〒012 湯沢市杉沢字森道上239 松田義徳方）。昭和63年10月20日発行。B 5判，118頁。 頒布価2,000円（送料込み）。

平鹿地方は，横手市・山内村・平鹿町・増田町・十文字町・大森町・大雄町・雄物川町の1市6町1村からなり，秋田県の南内陸部に位置し，総面積673 km² である。

秋田県内でも，特に豪雪地帯で，ハイイヌガヤ・ヒメアオキ・ヒメモチ・ユキツバキ・ホナガクマヤナギ・マルバマンサク・マルバゴマキ・キバナイカリソウ・エチゴキジムシロ・クロバナヒキオコシ・タイリンヤマハッカなどの日本海要素を多く含み，中でもユキツバキ・ホナガクマヤナギは，最も密度が高いと述べられている。所産植物として，シダ植物64種，裸子植物9種，単子葉植物259種，双子葉植物601種（離弁花類360種，合弁花類241種）計933種類があげられている。

○ 中越信和・樋口正信 **下蒲刈町の植物** 下蒲刈町，昭和63年11月3日発行。B 5判，66頁＋カラー図版4頁 非売品。

下蒲刈町は，広島県安芸郡を構成する1町で，呉市仁方港の南東に位置する下蒲刈島とその南方海上にある3無人島（上黒島・下黒島・ヒクベ島）をあわせ，総面積は，8.78 km² である。

現存する植生の主なものは，島の南半部を中心に広く分布するアカマツ林と北半部に北較的多いアベマキ・コナラ・ノグルミなどの落葉広葉樹林及びミカン畑となっているが，島内に残されている自然林（大亀のコジイ林・梅崎神社々叢・シイノキ原のコジイ林）は過去においてコジイ林が被っていた証拠になるものである。目録に所載されている種類は，コケ植物127種，シダ植物50種，裸子植物6種，単子葉植物104種，双子葉植物339種（離弁花類210種，合弁花類129種），計626種で，瀬戸内海の2000島の中で，その島の植物相が明らかになっている厳島とくらべて，単位面積当りの種数は本島の方がはるかに多い。（里見信生）